学苑　No. 850　(1)〜(23)（2011・8）

ヘレーネ・シュテッカーの学問修業時代（1892－1901）

掛　川　典　子

本稿は，1892年のベルリン到着から，1896年にベルリン・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学（Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin 1949年よりフンボルト大学と改称）での聴講を開始し，1901年にスイスのベルン大学でロマン主義の美学理論に関する博士論文を書き上げ学位を取得するまでの，ヘレーネ・シュテッカー（Stöcker, Helene 1869. 11. 13-1943. 2. 23）の学問修業時代を対象とする。「ヘレーネ・シュテッカーのエルバーフェルト時代（1869-1892）」（掛川 2009）の続編にあたる。ヘレーネは哲学博士号を取得した最初のドイツ人女性の一人である。ドイツでは女性がまだ正式に大学に入学することを許されていない時代に，ヘレーネは聴講生としてベルリン大学の講義に参加し，当時他国に先駆けて外国人女性に門戸を開いていたスイスの大学で哲学博士の学位を取得した。自分の力で運命を切り開いていくヘレーネの，積極的で活発な学生生活の様子からは，出会った困難よりも，学問する喜びと知識人たちとの交流の豊かさが生き生きと伝わってくる。

ヘレーネの伝記研究のなかでも最も詳細なクリストル・ヴィッケルト（Wickert, Christl）の『ヘレーネ・シュテッカー 1869-1943: 女性運動家，性改革者，平和主義者: 伝記』（Wickert 1991）を基調にして，本稿はさらにペトラ・ランチュ（Rantzsch 1984），ハイデ・シュルップマン（Schlüpmann 1984），ロルフ・フォン・ボッケル（Bockel 1991），グッドルン・マイアーホーフ（Maierhof 1995）やシュトプチィック=プフントシュタイン（Stopczyk-Pfundstein 2003），そしてシュテッカー自身の著作を参照してまとめた。人名については原綴りを記し，判明した限りで生没年を付した。またヴィッケルト（Wickert 1991），ゲルハルト（Gerhard 1995），『ドイツ伝記百科』（Vierhaus 2005-2008）などを用いて脚注で解説した。

1　ベルリン到着と新しい生活（1892-1896）

ヘレーネは1892年の1月2日に，故郷のエルバーフェルト（Elberfeld）を発ち，ベルリンに出てきた。親友のアッディ・フォイクト（Voigt, Addi）も一緒にベルリンに来た。ふたりはまずマルチン・ルター通り（Martin-Luther-Straße）のハウプトマン・ゲッツ夫人（Hauptmann, Götz）の下宿に行った。ヘレーネはそれ以前女学校時代にすでにベルリンを訪問し，その折にミナ・カウアー（Cauer, Minna 1841-1922）[1] やケーテ・シルマッハー（Schirmacher, Käte 1865-1930）[2] などと知り合っており，

1　カウアーは教師，著作家。1881年に2度目の夫，歴史学教授エドワルト・カウアー（Cauer, Eduard）の死後，女性運動に従事し始める。1888年「女性福祉協会」（Verein Frauenwohl）をベルリンに設立し，長年にわたり代表者。1895年からリリー・ブラウン（Braun, Lily 1865-1916）とともに雑誌『女性運動』（*Die Frauenbewegung*）を創刊，編集者。1899年「進歩的女性協会」（Verband fortschrittlicher Frauenvereine）の執行部会員。1902年「女性参政権協会」（Verein für Frauenstimmrecht）の創設メンバー。

2　シルマッハーは，女性教員試験合格の後パリで語学を学び，リヴァプール（Liverpool）で高校教師になった。

このたびはシルマッハーの仲介によって，ハウプトマン・ゲッツ夫人を紹介されていた。

ハウプトマン・ゲッツ夫人のところで，ヘレーネは，バルト出身の女流画家マルタ・ウンフェルハウ（Unverhau, Martha 1868-1947）[3] と出会った。マルタは画家ルートヴィヒ・デットマン（Dettmann, Ludwig 1865-1944）[4] の弟子であった。ヘレーネとマルタは親しくなり，その交流は 1917 年のロシア革命によって断たれるまで続いた。ヘレーネとアッディは，まもなくそこから遠くないシュテックリッツァー通り（Steglitzer Straße）に引越した。数週間後にヘレーネは別の住居を見つけ，1899 年にスコットランドのグラスゴウ（Glasgow）に行くまで，ずっとそこでアッディとは別の同居人と住まいを分かって住んだ。この同居人が誰であったかは，ヘレーネが記していないので不明のままである。

当時ベルリンは近代化の進む国際都市であり，労働運動にとっても政治的，文化的中心地であった。未婚の母や病人のための住宅が作られ，公共食堂（Volksküche）や衛生問題のための相談所も設置され，社会問題に意識的に参加した医師や市民女性が奉仕活動をしていた。ビスマルク（Bismarck, Otto Eduard Leopold Fürst von 1815-98）は労働運動の高まりに対処するため，1883 年疾病保険，1884 年事故保険，1889 年老齢保険と廃疾保険といった社会保障立法を次々に手掛けた。ベルリンの社会的文化的活況は，エルバーフェルト時代から労働者に共感を寄せていたヘレーネにとって，さらなる刺激と理解をもたらす好条件を提供した。

1892 年にベルリンでは，社会民主主義的ジャーナリストで文学批評家のフランツ・メーリンク（Mehring, Franz 1846-1919）[5] が，「自由国民劇場」（Freie Volksbühne）の主宰者になった。1890 年 7 月 29 日に創設されていた「自由国民劇場」は労働者に劇場芸術を提供しており，ゲルハルト・ハウプトマン（Hauptmann, Gerhart 1862-1946）[6] の作品『日の出前』（*Vor Sonnenaufgang*, 1889）と『織工』（*Die Weber*, 1892）が大成功を収めた。劇場で見た多くの舞台のなかでも特にハウプトマンの「織工」は，ヘレーネにとって貧民階級の女性の困窮を明らかにしてくれる印象深いものとなった。ガブリエレ・ロイター（Reuter, Gabriele 本名 Elise Kaloline Alexandrine 1859-1941）[7] やヘレーネ・ベ

1891 年から市民的女性運動の急進派のなかで積極的に活動した。1895 年にチューリヒで哲学博士取得，1910 年まで様々なドイツとオーストリアの新聞のパリ特派員を務め，1919 年にワイマール国民議会で DNVP の議員になった。

3 ウンフェルハウは，画家。ミッタウ（Mitau）のバルト系商家の出身。リガ（Riga）のユーゲントシュティルの画学校で芸術教育を受けた。肖像画家で歴史画家でもあったフリードリヒ・デーリンク（Döring, Friedrich 1818-1898）はミッタウのグーヴェルネメント・ギムナジウム（Gouvernement-Gymnasium）で 1859 年から 1890 年まで図画教師を務めたが，そのデーリンクによってこの職業に関心を持ち，ルートヴィヒ・デットマンのもとで学ぶためにベルリンに滞在した。1894 年からミュンヘンに移る。1907 年にミッタウの高等学校教諭ヴィルヘルム・ロウリノヴィッツ（Lawrynowicz, Wilhelm）と結婚。1919 年にヴェルサイユ平和条約の規定に従い，ドイツの国籍を選択した。

4 デットマンは，画家，教授。1917 年までケーニヒスベルク（Königsberg）の芸術アカデミーの校長。1920 年から 1937 年まで「ベルリン芸術家協会」（Vereins Berliner Künstler）の会長。アルトナ議事堂やダンチィヒ工業大学，キール大学講堂の壁画を制作。

5 メーリンクは，1891 年から SPD。1902 年から 1907 年まで『ライプツィヒ民衆新聞』（*Leipziger Volkszeitung*）のチーフ編集者。1906 年から 1911 年までベルリン党学校の教員。1918/19 年に KPD の共同設立者。

6 ハウプトマンは，『日の出前』で有名になった自然主義的戯曲の作家，詩人。1912 年ノーベル文学賞。1933 年以後さらに活動した。

7 ロイターは作家。エジプトのアレクサンドリア（Alexandria）生まれ。大商人の娘。1880 年にヴァイマール（Weimar）へ。ニーチェやイプセンによって精神的発展を遂げる。1895 年から 1899 年にはミュンヘン

ーラウ（Böhlau, Helene 1856-1940）[8] やクラーラ・フィービク（Viebig, Clara 1860-1952）[9] などの，社会的問題に政治的に参加した女性の小説は，女性に及ぼす男性の支配に抵抗する内容のものであり，ヘレーネはそのような作品を集中的に読んだ。例えば未婚の母に対するロイターの「先入観の無い態度」は，ヘレーネ自身のそれからの人生に大きな影響を与えた（Wickert 1991; 26），とヘレーネは後にロイターの 70 歳の誕生日に寄せて書いている。

ベルリンでヘレーネは，できるだけ多くの文化的催しを体験しようとし，当時夕方はたいてい劇場や演奏会や文学講演会に赴き，また社会運動や女性運動の集会にも足を運んだ。1892 年 11 月にはヘレーネは「ドイツ平和協会」（Die Deutsche Friedensgesellschaft）の設立に参加した。この協会はドイツで最初の大規模な平和主義の組織であり，1892 年にヘルムート・フォン・ゲルラッハ（Gerlach, Helmut von 1866-1935）やアルベルト・アインシュタイン（Einstein, Albert 1879-1955）らによって，オーストリアの女性作家ベルタ・フォン・ズットナー（Suttner, Bertha von 1843-1914）[10] と連帯して設立された。ズットナーは，1889 年に発表した『武器を捨てよ！』（*Die Waffen nieder!*）で著名な作家で，その市民的平和運動の功績によって，1905 年にノーベル平和賞を受賞した。ズットナーのこの小説の平和主義は，改革派の道徳を身につけて育った若きヘレーネのその後の平和運動の基盤となった。この時平和主義的理念に感激したヘレーネはズットナーとの出会いの「夢のような興奮の余韻」（Rantzsch 1984: 32）に浸りながら，「ドイツ平和協会」に入会した。

1893 年 11 月にはヘレーネは，雑誌『自由劇場』（*Freie Bühne*）に「近代的女性」（Die moderne Frau）と題する，男女交際の倫理についての最初の論考を発表した（Bockel 1991: 8）。そこでヘレーネは，リベラルな階層にあってすら女性は「女奉公人」か「主婦」としか見なされないと指摘し，自分の発展可能性を追求する新しい女性，「賢い男性が話すときにもはやただ黙って傾聴するのみではない」女性を，「近代的女性」として描き出した。その他にもヘレーネは，例えば，1894 年に「女性思想」（Frauengedanken, in; *Volkserzieher*），1897 年には「男性運動」（Männerbewegung, in; *Kritik*）及び「近代的女性の愛の手紙から」（Aus der Liebesbrief einer modernen Frau, in; *Magazin für Literatur*），1898 年には「私たちの価値転換」（Unsere Umweltung der Werte, in; ibid.），「議会における女子ギムナジウム」（Das Mädchengymnasium in Abgeordnetenhause, in; ibid.）も発表している。それらはその

において『自由劇場』と交信を持つ。1899 年よりベルリン。後にヴァイマールに赴き，死去。第一次世界大戦の終結に向けて解放的傾向の作品を発表。20 年代には市民的女性運動も扱う。

8　ベーラウは作家。家庭で綿密な私的教育を受け，ドイツやイタリアを旅行し見聞を広める。1882 年から短編小説や長編小説を発表。1886 年にコンスタンチノープル（Constantinople）でロシア系ユダヤ人フリードリッヒ・アルント（Arndt, Friedrich）と結婚した。アルントはユダヤ教からイスラム教に改宗し，オマール・アル=ラシード・ベイ（Omar al-Raschid Bey）と自称，1910 年に死亡。ベーラウは自然主義に影響された社会批判的長編『母の権利』（*Das Recht der Mutter*, 1896）でよく知られ，長く女性の権利のために尽力した。

9　フィービクは作家。1894 年から小さな短編小説を『ベルリン民衆新聞』（*Berlin Volkszeitung*）に書く。1896 年に出版業者コーン（Cohn, Friedrich Theodor）と結婚。ユダヤ系出自であったためナチの権力掌握後危機にさらされる。1937 年にブラジルに行くが，帰国して 1940 年からミッテルヴァルデ（Mittelwalde）に住み，1946 年にベルリンに帰り貧窮生活のなかで死亡。世紀末のころには彼女は最もよく読まれた女性作家の一人であった。

10　ズットナーはオーストリアの女性作家。平和主義者。キンスキー（Kinsky）伯爵家に生まれ，作家ズットナー（Suttner, Arthur von 1850-1902）と結婚（1876）。女性の立場から戦争反対を叫ぶ小説を書く。「オーストリア平和の友の会」を設立。ノーベル平和賞（1905）。

後に発表された原稿も合わせて，1906年に刊行されたヘレーネの個性的な女性論集『愛と女性』(*Die Liebe und die Frauen*) に再録されている（掛川 2010: 300)。可能な限りすべてを学び，自分のあらゆる可能性を発展させようと試み，自立を求める「近代的女性」をヘレーネは自認して，「近代的男性」とともに前進すべく，新しいその立場から行動し，語り，書き，発表し続けた。

勉学についてみると，当時ベルリンには女子のギムナジウムはまだ存在しておらず，女性が女学校以上の教育を受けるための進路としては，女性教員育成教育が唯一の可能性であった。1890年の「全ドイツ女性教員連盟」(Allgemeiner Deutscher Lehrerinnenverein. ADLV) の設立後，ベルリンでは女子のための最初の「実業コース」(Realkurse) ができ，3年後に「ギムナジウム・コース」(Gymnasialkurse) ができた（Maierhof 1995: 30)。そこでヘレーネはまずルチエ・クライン（Crain, Lucie) の「女性教員ゼミナール」(Lehrerinnenseminar) に通い，1893年11月に「中等・高等女学校」(höhere und mittlere Mädchenschule) の女性教員試験を終えた。さらに，ヘレーネはベルリンに開設された，ヘレーネ・ランゲ（Lange, Helene 1848-1930)[11] による「女性ためのギムナジウム・コース」(Gymnasialkurse für Frauen) に1894年から1896年まで通った。この「ギムナジウム・コース」では娘たちはアビトゥーア（大学入学資格）を準備し，そうすれば学外受験生としてギムナジウムでのアビトゥーア試験を受験できた。その上さらにヘレーネは，「ヴィクトリア＝リセウム」(Viktoria-Lyceum) で「上級女性教員試験」(Oberlehrerinnenprüfung) のための歴史コースに通った。

しかしもともとヘレーネは女教師になろうという願望は持っていなかった。「著作家として仕事する」ことを望み，「男女の平等のために戦う」ことを欲していた。「この課題を満たすためには，当時女性として到達可能な教育段階よりも，いっそう根本的な準備と教育，より豊かで包括的な生活体験を必要とする」(Wickert 1991: 26) とヘレーネは考え，さらなる勉学を，大学での学問研究を目指した。

2　女性の学問をめぐる闘争

ヴィッケルトは，伝記のなかでヘレーネの学問修業時代を，「男性領域のなかの自己発展: 大学生活（1896-1901)」と題している。この時代の初期にはヘレーネは女性運動に熱心であって，自伝の草稿のなかで自身が最初に参加した女性運動について報告している章を，「女性の学問をめぐる闘争」(Wickert 1991: 27) と題している。

当時大学で学ぶことを望む女性たちは，参加したい講義を開講している教授のもとに個別に赴き，教授本人から聴講許可をもらった場合にのみ聴講生として講義室に入ることができた。大学入学資格を満たそうとする女性たちの試みは続けられ，20世紀初頭のほぼ10年の間に，ドイツの大学は次々に女性の正式入学を許可するように変わっていった[12]。

プロイセン女性として最初に，ジグマリンゲン（Sigmaringen）でアビトゥーアを取得したヒルデガルト・ヴェークシャイダー（Wegscheider, Hildegard 1871-1953)[13] は，後にプロイセンの最初の女性

11　ランゲは，雑誌『女性』(*Die Frau*) の編集兼発行者。女性のためのレアルシューレとギムナジウム・コースの主導者。ゲルトルート・ボイマー（Bäumer, Gertrud 1873-1954）とともに指導した市民的女性運動の穏健派の代表者。

12　1893年にバーデン州カールスルーエ（Karlsruhe）にドイツ初の「女子ギムナジウム」(6年制) が創設された。バーデン州では1900年に正式に女子の大学入学を許可したので，1899年に女子で最初のアビトゥーア合格者が卒業し，1901年にハイデルベルク大学とフライブルク大学に最初の女性入学者が登録をした。

13　ヴェークシャイダーは，チューリヒで勉学。ハレ（Halle）で哲学博士取得（プロイセン女性として初)。

哲学博士となった。ヴェークシャイダーは，女性の正式の入学以前に，聴講生として1896年にベルリンで歴史家のハインリヒ・フォン・トライチュケ（Treitschke, Heinrich von 1834-1996）[14] に彼の講義を聞かせてもらいたいと願い出たが，そのときトライチュケは「飲めない学生，…絶対だめだ」（Wickert 1991: 27）と応じた，と自分の自伝に報じている。ヘレーネ自身も1895年にトライチュケに聴講を願い出たが，「ドイツの大学は500年来男性のために定められてきた。そして私は大学を破壊する手伝いはしたくない」（Bockel 1991: 1）と拒否された，とヘレーネは1930年代にもこのことをまだ覚えていた。

ヘレーネが大学入学を目指した時代は，女性がこのような道を開く闘いの時代であった。1897年にアルトゥーア・キルヒホフ（Kirchhoff, Arthur）は，ドイツ人教授たちに学問をするための女性の能力についてアンケートを行い，その結果を公表した。アンケートによれば，「悟性，論理，自立，確実さ，創造的な業績能力，関連を把握する能力，判断の明晰さ，決断の喜び，エネルギッシュな行動の心構え，責任感，特に精神的創造性，創造的理念，独創性と権威」といった「特別な質」が学問に必要と列挙された。このような資質は，男性だけが教育によって得られるという教育システムが前提とされており，学問は「男性性」に属するという「明らかな表象」（Wickert 1991: 27-28）を生むものであった。それでも女性たちは大学を目指した。

ベルリンでの女性の学問をめぐる闘いのなかで，ヘレーネは様々な運動に従事した。1894年には彼女は，運動に必要なすべての著作を集めるという「女性問題のための図書館」（Bibliothek zur Frauenfrage）の建設を目指す委員会の会員として働いた。後にこの図書館はベルリン市が引き継いだ。ヘレーネは，講義室に男性の聴衆に混じって坐す唯一の女性であるような状況をただ我慢するのではなく，同じ境遇の女性たちを探して，マリー・ラシュケ（Raschke, Marie）ら数名の仲間とともに，1896年冬にはベルリン大学内に「学問する女性協会」（Verein Studierender Frauen）を設立した。協会は半年毎に講演を催したが，この講演会への参加は女性のみに限定されてはいなかった。「社会科学学生協会」（Sozialwissenschaftlicher Studentenverein）の男性会員も参加者として迎えられた。「近代的生活の諸問題に関心を持っている」限り，「男子学生と，学んでいる女性の間に良い関係を築くために」（Wickert 1991: 28）という見解によって，両性に開かれていた。「男女の学ぶ者たちが現代の問題を相互に語り合える中立の土台を作ることは，私や数名の学問する女性たちにとって望ましく思えた。そこで私たちは学問する女性協会を設立した。当時存立していた社会科学学生協会が私たちに催し物の招待を送ってきた……そこで私たちはこちらの側では教授や男子学生を私たちの催し物に招待した」（Bockel 1991: 8-9）とヘレーネは書いている。

ところでヘレーネは，1896年に「学問する女性協会」での最初の講演を，「フリードリヒ・ニーチェと女性」（Friedrich Nietzche und die Frauen）に関して行った。この講演の内容は1898年に「私たちの価値転換」と改題されて『文学雑誌』（*Magazin für Literatur*）に載った（Schlüpmann 1984: 13）。この講演のなかで，ヘレーネはニーチェ（Nietzsche, Friedrich Wilhelm 1844-1900）の「女性嫌悪」を彼

教師となる。1898年からSPD党員。1920年から1933年までベルリンで上級学校視察官。1919年から1933年までプロイセンの州議会議員。

14 トライチュケは，歴史家，ジャーナリスト。1871年から1888年まで国民自由党の帝国議会議員。ビスマルクの帝国の基礎付け，プロイセン主義，ドイツの統一を支援した。5巻の『19世紀ドイツ史』（*Deutsche Geschichte im 19. Jahrhundert*, 1879-94）において国家主義的ドイツ市民の歴史像を規定した。

の母親と妹との関係という背景から心理学的に解釈した。妹のエリーザベト・フェルスター=ニーチェ（Elisabeth Förster-Nietzsche 1846-1935）は兄のためにバーゼル時代に家政を担った。ヘレーネは，ニーチェの女性蔑視は，「非常に保守的で幼稚な」（Wickert 1991: 58）妹への明確に表現しきれない親近性から理解できると考えていた。

ヘレーネはベルリンに来てすぐの 1892 年 1 月に，当時は「ニーチェ=アルヒーフ」の会員であったフリッツ・ケーゲル（Kögel, Fritz）の『ツァラトゥストラ』（*Also sprach Zarathustra*）に関する講演の掲示を見て聞きに行き，深い印象を受けている（Schlüpmann 1984: 13）。同年ニーチェ全集のなかから『悦ばしき知識』（*Die fröhliche Wissenschaft*）が刊行され，これをヘレーネは特別に好んだ。しかしヘレーネがニーチェの哲学に集中的に取り組みはじめたのは 1895 年の夏であった。「ある非常に衝撃的な体験」から立ち直った時であり，それをヴィッケルトは，ヘレーネが「それ以上は語らないある失望させられた恋愛からの回復」（Wickert 1991: 56）と解説している。ヘレーネは，ニーチェの道徳批判と価値批判を，女性としての自身の状況から批判的に解釈して，後に独自の世界観，両性関係の倫理へと発展させた。「私たちの価値転換」のなかで，「神，絶対的真理，絶対的なものは転落した，それで男性の絶対的な優越も転落した」（Stöcker 1906: 15）とヘレーネは，ニーチェの理論を利用して女性の立場から男性優位の価値体系の崩壊を主張している。

ところでヘレーネは，ニーチェの妹エリーザベトに 1895 年 1 月にすでにナウムブルク（Naumburg）で会っている。ヘレーネは，ニーチェの伝記の第一巻を読んだ後エリーザベトに手紙を出し，そこでエリーザベトがヘレーネを招待したという経緯がある。

ヘレーネが記したそのはじめての訪問の印象を，ヴィッケルトは次のように紹介している。訪問したヘレーネを，「額に巻き毛スタイルのきゃしゃな人影が出迎えたとき，なぜフリードリヒ・ニーチェが女性たちについて特別に高い見解を持っていなかったのかを，（ヘレーネは）一瞬で理解した。というのは，この女性は……彼の生涯において良い意味でも悪い意味でも決定的影響を与える意義を持ったし，確かに女性についての彼の判断に影響を与えた……，自分はニーチェを理解しておらず，彼の作品と継続的に関わることによって改めて彼の世界になじんでいるのだと，（エリーザベトは）当時（ヘレーネに）述べる勇気も持っていた」（Wickert 1991: 58）。そしてその折ヘレーネは，ニーチェが 1889 年に精神的に錯乱して翌年から世話されて暮らした母親の家を外からだけ見た。

また，「学問する女性協会」の会員は「……嬢」（Fräulein）という呼称を拒否し，統一呼称である「……さん」（Frau）を主張した。これは女性の強化された自己意識の表明であり，「習慣，言語の慣用の変革」を意味した。ヴィッケルトによれば，この呼称は 1919 年にはじめて大臣による指令によって実際に公的に認められた（Wickert 1991: 28）。興味深いことにこのことは，現代フェミニズムのなかで，呼称 Miss と Mrs.の使用を拒否して Ms を用いる運動と，その意味が同じであるように思われる。

ところで「学問する女性協会」に男性も招かれたのとは反対に，大学に近いシャドウ通り（Schadowstraße）にある「女性クラブ」（Frauenklub）には女性だけが入れた。そこをヘレーネはしばしば訪れた。ここでは講演の夕べと並んで勉学体験の交換のために会合も持たれ，女性の勉学の要求のための政治的行動が準備された。ヘレーネはアビトゥーアの準備をしているときに「リセウムクラブ」（Lyzeumklub）の設立に参加したが，その「リセウムクラブ」と「女性クラブ」は連携していた。さらに 1888 年に設立された「女子教育－女性学問協会」（Verein Frauenbildung－Frauenstudien）に

も，ヘレーネは参加した。この協会の任務のなかでの活動をヘレーネは，勉学を終えた後も継続した。たとえば 1902 年にもヘレーネは講演旅行を企てたが，それは新しい支部の設立のためであった。協会は，女学校（Mädchenschule）を男性のギムナジウムや上級実業学校（Oberrealschule）と同等にすることを主張し，大学への女性の自由な入学を要求していた。

大学への女性の正式入学は，アビトゥーアに合格してもなかなか容易ではなかったので，1898 年 5 月 18 日に，「女子教育―女性学問協会」は協会の設立 10 周年の機会に，女子教育に関するプロイセン議会での続行中の審議に対して大抗議集会を開催した。その抗議集会で講演者を務めた女性は，翌 1899 年に「進歩的女性協会」（Verband Fortschrittlicher Frauenvereine）を設立する。1898 年の講演会のなかにはマリー・シュトリット（Stritt, Marie 1855–1928）[15] とアニタ・アウクスプルク（Augspurg, Anita 1857–1943）[16] そして学問する若者の代表としてヘレーネもいた。このときの議会前での抗議集会での講演はヘレーネが最初に公衆の面前で行った演説であり，ただちに「議会における女子ギムナジウム」と題して『文学雑誌』に発表された。ヘレーネは，「立法のなかで主張しない者は，その利益も代表されない」と述べた。そのときヘレーネは『ファウスト』（*Faust*）から「私は勇気を感じる，世界に参加し，地上の痛みに，地上の幸福に耐える勇気を」を引用したが，ベルリンの保守的新聞によって「非常にいかがわしい精神の印としてレッテルを貼」られる（Wickert 1991: 29）というジャーナリズムによる悪意の歪曲の体験をした。

そもそもヘレーネは，ミナ・カウアーとの関係を保って，ベルリンにやってきた。カウアーは 1888 年には「女性福祉」（Frauenwohl）を設立し，さらに女性解放の運動を進めていた。ヘレーネが「女子教育―女性学問協会」に参加しているのも，カウアーとの関係に立脚している。この点で学問の可能性を追う若きヘレーネは「小市民的女子学生で女権主義者」であったが，1896 年には「プロレタリア的女性運動家，後のコミュニスト」であるクララ・ツェトキン（Zetkin, Clara 1857–1933）[17] を，個人的にではなかったが，見知った（Rantzsch 1984: 35）。1896 年 9 月にヘレーネは初めて「国際女性会議」に参加したが，そのときにベルリンのこの会議でツェトキンは労働者の立場から市民的な女性運動に一貫して対決し，ヘレーネに強い印象を与えている。カウアーをはじめとする他の進歩的市民女性運動家はツェトキンに対して好意的ではなかったが，このときすでにヘレーネは彼女たちとは異なる感想を抱いていた。やがてヘレーネは革命的な労働運動に共感を持つようになるのだが，第一次世界大戦後の 1927 年にソビエト政府からの招待でモスクワを訪問した際，実際にツェトキンと会っている。

15　シュトリットは，女優。オペラ歌手と結婚。1891 年より女性運動に参加。1894 年にドレスデンで最初の「権利擁護協会」（Rechtsschutzverein für Frauen）を設立。「進歩的女性協会」会員。1899 年から 1910 年まで BDF の会長。1904 年より「女性参政権世界同盟」（Weltbund für Frauenstimmrecht）の会長代理。

16　アウクスプルクは教師，女優，法律家。1897 年チューリヒにて法学博士。ミナ・カウアーと並ぶ市民的女性運動急進派の重要人物。1893 年にカールスルーエの女子ギムナジウム設立。1896 年に「進歩的女性協会」設立。第一次世界大戦勃発後特に後の「平和と自由のための国際女性連盟」に連なる女性の平和運動に参加。

17　クララ・ツェトキンはライプツィヒで教育を受ける。パリ，シュツットガルト，ベルリンで活躍。亡命ロシア人オシップ・ツェトキン（Zetkin, Ossip）とパリで共同生活。プロレタリア女性解放運動に生涯を捧げた。26 年間ドイツ社会民主党の女性向け機関誌『グライヒハイト』（*Die Gleichheit*）の編集長。モスクワで没しクレムリンの壁に葬られる。

3　ベルリン大学での学業（1896-1898）

1896年の秋に，ヘレーネの「長年の憧れ」は実現し，大学での聴講を始めた。プロイセンでは，女性の正式な学籍登録は1908年8月18日から可能になったが，それ以前には1896年から，聴講生としてではあるが教授が個別的に許可すれば，講義やゼミナールに参加できるようになっていた（Rantzsch 1984: 32）。ヘレーネはこの可能性を利用した女性たちのなかにいた。ベルリン・フンボルト大学（Humboldt-Universität zu Berlin）の聴講生帳（Gasthörerinnen-Bücher）を調べたシュトプチィック=プフントシュタインによれば，ヘレーネは125番目の聴講生（この数は男女の聴講生全体のなかでのものと思われる）であった（Stopczyk-Pfundstein 2003: 41）。その学期の文学と芸術の聴講生の半数以上（56名）がアメリカ合衆国とロシアからの外国人女性であったが，さらにオーストリアやイギリス，フランス，オーストラリア，ルーマニア，ポーランド，ノルウェイからも聴講生は来ていた。たいていの女性が文学と芸術を登録したが，96名の女性のうち17名のみが哲学を聴講科目にした。ほとんどの女性が31歳以上で，ほとんど全員が独身であった。26歳のヘレーネは比較的若い方ということになる。

ヘレーネは大学で文学史，哲学と国民経済学といった授業に席を確保した。最初に彼女は，クルト・ブライジヒ（Breysig, Kurt 1864-1940）[18] のゼミナールを訪ねた。それは，シュタイン（Stein, Karl Freiherr 1757-1831）[19] とハルデンベルク（Hardenberg, Karl August Fürst von 1750-1822）[20] の改革のもとでの農民解放に関するものであった。ブライジヒは1897/98のゼミナールのなかで，ドイツの大学教員としては最初にニーチェについての講義を予告し，ヘレーネはそれに期待した。ブライジヒは，1900年にニーチェの墓でペーター・ガスト（Gast, Peter 1854-1918）[21] と並んで追悼スピーチを行っている。

さらにヘレーネは，ヘルマン・グリム（Grimm, Hermann 1828-1901）[22] のミケランジェロについての芸術史講義を望んだが，拒否された。女性を受け入れないことは，ヘレーネが描いていたベッティーナ・フォン・アルニム（Arnim, Bettina von 本名はElisabeth 1785-1859）[23] の婿のイメージ像には合わないことであった。社会科学と国民経済学を彼女は，アドルフ・ヴァーグナー（Wagner, Adolf Heinrich Gotthilf 1835-1917）[24] とギュスターヴ・シュモラー（Schmoller, Gustav von 1838-1917）[25] の

18　ブライジヒは歴史家，社会学者。ベルリン大学歴史学教授（1923-34）。

19　シュタインはプロイセンの政治家。農民改革，都市条例，近代的内閣制度を立法化。彼の改革案はすべてが実現されたわけではないが，ハルデンベルクに受け継がれ，近代国家化の基礎になった。

20　ハルデンベルクはプロイセンの政治家。プロイセンの財政を建て直した。ヴィーン会議を利用してプロイセンの領土を拡大した。

21　ガストは，本名はハインリヒ・ケスリッツ（Köslitz, Heinrich）。音楽家。ニーチェの友人で弟子でもあった。ニーチェの妹とともに民族理論方向のニーチェ神話を発展させ，それは後の『わが闘争』（*Mein Kampf*, 1925-26）にみられる民族賛美の原型となった。

22　ヘルマン・グリムはヴィルヘルム・グリム（Grimm, Wilhelm）の息子であり，芸術史・文学史を専門とした。ベッティーナ・フォン・アルニムの娘ギセラ（Gisela）と結婚した。

23　ベッティーナは女性詩人。ブレンターノの妹。1811年にアルニムと結婚。自由な創作も織り込んだ『ゲーテとの往復書簡』（*Goethes Briefwechsel mit einem Kinde*, 1835）で有名。

24　ヴァーグナーは経済学者。後期歴史学派に属し，講壇社会主義者右派の代表者。ベルリン大学教授（1870-1917）。社会政策学会（Verein für Sozialpolitik）の創設（1873）に参加。キリスト教社会党を結成（1878）。下院議員（1881），上院議員（1910-17）。

もとで学び，「社会的生活への洞察と認識」を得た。「若者が熱狂して大きな社会的正義を求めて努めるときには，社会的構造を冷静な現実のなかで知ることも重要であった」(Wickert 1991: 29) とヘレーネは記している。超満員の学生集会に参加したときヘレーネは，国民経済学者のマルクス主義的分析と社会学者ヴェルナー・ゾンバルト (Sombart, Werner 1863-1941)[26] に興奮したが，ゾンバルトの「虚栄心と尊大さ」には反発を感じた。ヘレーネは，後のゾンバルトのマルクス主義からの離反を，彼の不安定な性格の表現として解釈した。

ベルリン大学での自分の最も重要な教師として，ヘレーネは文学史家エーリヒ・シュミット (Schmidt, Erich 1843-1913)[27] と哲学者ヴィルヘルム・ディルタイ (Dilthey, Wilhelm 1833-1911)[28] を挙げている。ヘレーネは，シュミットの弟子のオスカー・ヴァルツェル (Walzel, Oskar 1864-1944)[29] のもとで後にベルン (Bern) で学位論文を書く。またディルタイは，ヘレーネを助手にしてシュライエルマッハー (Schleiermacher, Friedrich Ernst Daniel 1768-1834)[30] の伝記の仕事を手伝わせた (1897〜1898)。ヘレーネはディルタイのもとで知った「生の哲学」を，哲学者で社会学者のゲオルク・ジンメル (Simmel, Georg 1858-1918) の講義を聴講しながら，さらに熟考した。

エーリヒ・シュミットをヘレーネは，「立派な美しい外見をして，自分の周りにほとんど彼を神のように崇拝する学生と女学生の大きな輪をひき連れている，如才なく，愛想の良い，世慣れた人物」(Wickert 1991: 30) と描写している。シュミットの最初のゼミナールでヘレーネは，クロップシュトック (Klopstock, Friedrich Gottlieb 1724-1803)[31] の頌歌「チューリヒ湖」(Zürichersee) について研究した。シュミットの学生たちの会合である「独文学者飲み会」(Germanistenkneipe) からは女性は締め出されていた。女子学生は夏の遠出にだけは参加できた。後年になってもヘレーネは，ベルリン北部の狩の城テーゲル (Jagdschloß Tegel) への遠出のことを詳しく覚えている。このときにヘレーネとシュミットは，ともにテオドール・シュトルム (Storm, Theodor 1817-1888)[32] を偏愛していることを知った。シュトルムが 1888 年に死ぬまで，シュミットは彼の友人だった。ヘレーネはシュミットのもとで初めてロマン主義と新ロマン主義とに取り組み，博士論文執筆へと促されていった。

---

25 シュモラーは経済学者。ベルリン大学教授 (1882)。プロイセン上院議員 (1884)。社会政策学会創立 (1872) の中心人物。

26 ゾンバルトは経済学者，社会学者。ベルリン大学教授 (1917)。マックス・ヴェーバー (Weber, Max) とともに『社会科学及び社会政策雑誌』(*Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*) を編集 (1904)。

27 シュミットは文学史家であり，シュトラースブルク，ヴィーン，1886 年からはベルリンで教授を務めた。実証主義的文献学的方法を文学史，特に古典主義文学の形成に適用。1887 年にはゲーテの『原本ファウスト』(*Urfaust*) の草稿を発見した。

28 ディルタイは哲学者。ベルリン大学教授 (1882)。「生の哲学」と解釈学で有名。

29 ヴァルツェルは文学史家。ヴィーンに生まれる。ベルン (1897)，ドレスデン (1907) 及びボン (1921-33) にて教授。主にゲーテ以後の近代文学を研究。ディルタイの精神史的方法とビュルフリンの様式史的方法の統合を試みた。1923 年に『文献学必携』(*Handbuch der Literaturwissenscaft*)。

30 シュライエルマッハーは哲学者，神学者。改革派教会の牧師の家に生まれる。ヘルンフート兄弟団で教育される。ハレ大学でカント哲学を学ぶ。ハレ大学教授 (1808)。ベルリンの三位一体協会説教者 (1809)。ベルリン大学設立とともに神学教授となる (1810)。

31 クロップシュトックは詩人。敬虔主義的家庭に育つ。イエナ，ライプチィヒ (Leibzig) に学ぶ。チューリヒに赴き，デンマーク王に招かれコペンハーゲンに滞在 (1751-70)，後ハンブルク。祖国，友情，信仰等を扱った抒情詩，特に『頌歌』(*Oden*, 1771) によって，ドイツ近代詩の黎明をもたらした。

32 シュトルムは詩人，小説家。60 篇近い珠玉の短編小説を書いた。抒情詩的ロマン的な初期から叙事詩的写実的な後期へと移行。

またディルタイのゼミナールのなかで，ヘレーネのロマン主義への関心は好ましい仕方で生かされた。シュライエルマッハーとその婚約者で後に妻となったヘンリエッテ・ヴィリヒ（Willich, Henriette von Mühlenfels）との文通を研究するために，ディルタイがヘレーネを助手として雇用したとき，ヘレーネはまだゼミナールの議論にほとんど参加していなかった。ヘレーネを選んだのは，「彼の非常に敏感な心理学的勘に起因」（Wickert 1991: 30）しただけであろうとヘレーネは解釈している。ディルタイの家では，仕事の後はいつも食事のひとときを共にした。ディルタイの二番目の妻は非常に若く，彼女には夫の「深い精神性への相応の尊敬が」欠けていることをヘレーネは理解し，そのため若い妻を「クサンチッペ」（Xanthippe）であると感じていた。

1896 年から 1899 年までのベルリンでの学業はヘレーネのさらなる知的発展に影響を与えた。カール・ヴァインホルト（Weinhold, Karl 1823-1901）[33] は，テーマ的にはヘレーネの博士論文を引き受けられるはずの研究者であったが，女子学生を拒否したため，ヘレーネは大学を変わることを考慮せねばならなかった。エーリヒ・シュミットの勧めに基づき，ヘレーネはベルン大学にいるシュミットの弟子のオスカー・ヴァルツェルと連絡を取った。ヴァルツェルの専門領域はロマン主義であった。ベッティーナ・フォン・アルニムについて書きたいと言うヘレーネの企てについて，シュミットは，遺稿が未公開なので思いとどまるようにヘレーネに忠告した。

当時ブレンターノ（Brentano, Clemens 1778-1842）[34] の専門家ラインホルト・シュタイク（Steig, Reinhold 1857-1918）がアルニムの家族と一緒に遺稿をヴィーパースドルフ（Wiepersdorf）の辺境の所有地に保存していた。アルニムの家族は，アキム・フォン・アルニム（Arnim, Achim von 本名 Ludwig Joachim von A. 1781-1831）[35] の女友達，花嫁，妻そして未亡人となったベッティーナが，多くの男性すなわち，ザヴィニー（Savigny, Friedrich Carl von 1779-1861）[36]，ティーク（Tieck, Ludwig 1773-1853）[37]，ゲーテ（Goethe, Johann Wolfgang von 1749-1832）[38]，グリム兄弟（Grimm, Jacob 1785-1863[39]; Grimm, Wilhelm 1786-1859[40]），シュライエルマッハー，グナイゼナウ（Gneisenau, August Wilhelm Anton Graf Niedhardt von 1760-1831）[41]，ナトジウス（Nathusius, Johann Gottlob 1760-1835）[42]

---

33 ヴァインホルトは独文学者。ベルリン大学教授。アレマン語，バイエルン語，中高ドイツ語の文法書発行。

34 ブレンターノは詩人。父はイタリア出の富裕な商人。イエナ大学で学ぶ。ハイデルベルクで，アルニムと協力して不朽の業績となる『少年の魔笛』（*Des Knabes Wunderhorn*, 1806-08）を集成。後カトリックに改宗（1817）。

35 アキム・フォン・アルニムはロマン派作家。ベルリン生まれ。ブレンターノと協力してドイツ民謡集『少年の魔笛』を集成。

36 ザヴィニーは法律学者，政治家。歴史法学の建設者。ベルリン大学教授（1810-42）。プロイセンの法相（1842-48）。

37 ティークは作家。ハレ，ゲッティンゲン等で神学，文献学，文学等を学ぶ（1792-95）。夭折したヴァッケンローダーの影響下に中世ドイツ芸術への熱情からロマン主義に進み，初期ロマン主義の代表者とされた。後期は写実的作風に移った。

38 ゲーテは詩人，作家。古典派の代表。

39 ヤーコプ・グリムは言語学者。言語学に科学的方法を施し「グリムの法則」を立てた。弟とともに『ドイツ語辞典　16 巻』（1852-1943）を編集。ゲルマン民俗のなかに童謡を探り『グリム童話』（*Kinder- und Hausmärchen*, 1812-14）を編纂した。

40 ヴィルヘルム・グリムはゲルマン学者。兄とともにゲッティンゲンに赴き，司書（1830），大学教授（1831）となる。ベルリン学士院会員（1841）。

41 グナイゼナウはプロイセンの軍人。ザールフェルト及びイエナでナポレオン 1 世軍と交戦。プロイセンの軍制改革に努めた。ベルリン総督。元帥（1825）。

あるいはガイベル（Geibel, Emanuel von 1815-1884）[43] たちに示した熱狂が，アルニム夫妻の評判を壊すことを恐れた（Wickert 1991: 30）。1902 年にエールケ・ヴァルデマール（Waldemar, Oehlke 1862-1932）が，ベッティーナの全集の出版の仕事を始めたとき，エールケも文書のすべてを入手してはいなかった。孫と曾孫がはじめて遺稿から少しずつ売却した。残りの遺稿は最終的に 1945 年以降になって，ヴィーパースドルフの没収によって文芸学のために公表された。このような事情で，当時ヘレーネはベッティーナに関する企てを資料不足のため諦めざるを得なかった。

4　ティレとの恋愛（1897 夏学期）

ヘレーネは「個人的理由で」1898/99 の冬学期をグラスゴウで学んだ。この「個人的理由」とはアレクサンダー・ティレ（Tille, Alexander 1866-1912）[44] との恋愛問題である。ヴィッケルトはヘレーネの伝記のなかで，ティレとの章を「愛か職業か　アレクサンダー・ティレとの時代」と題している。

1897 年の春，女子学生のヘレーネは王立図書館に通っており，図書館に来る人々との交流も楽しんでいた。そのようなある日ヘレーネは，ひとりの若い男性をカフェに誘ったが，それがグラスゴウ大学のドイツ語・ドイツ文学の講師アレクサンダー・ティレだった。当時 31 歳のティレは，牧師の息子で，2 年前に出版された『ダーウィンからニーチェまで』（*Vom Darwin bis Nietzsche*）によって知られていた。ティレはニーチェとエルンスト・ヘッケル（Haeckel, Ernst Heinrich 1834-1919）[45] の熱心な信奉者であり，生殖について社会的ダーウィン主義的淘汰を明瞭に支持していた。「個人の尊厳と自己価値，形而上学的欲求」はティレにとっては「自然的衝動性」に属し，「理性的に導かれた行為」は生物学的に捉えられた彼の世界観のなかでは存在していない。そこには「フマニテートの精神における進歩」に余地はなかった。ヘレーネはこの著書に挑発されているように感じた。

ティレ自身が 1897 年春にベルリンに来たばかりだった。1899 年にデュッセルドルフ（Düsseldorf）で開催されるゲーテ展の準備として，ゲーテの『ファウスト』の調査をするためであった。独文学者であり哲学者であったティレは，『未来』（*Die Zukunft*）や『北と南』（*Nord und Süd*）といった雑誌を通して，イギリスの専門家として認められていた。彼はニーチェの『ツァラトゥストラ』を英語に翻訳し，最初の英米のニーチェ全集のために序文を書いた。ティレにはすでに，彼の妻ロッテ（Lotte）との間に 2 子があった。ボルフラム（Wolfram）は第一次世界大戦で兵士として没し，エッダ（Edda）は 1920 年代に大学講師になった。

「私たちが最初の出会いで直観的に通じるものを感じ，その後何の困難も無く毎日会えるのは特別な幸福だった」（Wickert 1991: 40）とヘレーネは書いている。ヘレーネとティレは昼食のために会い，

42　ナトジウスはタバコ工業家。

43　ガイベルは詩人。牧師の子。バイエルン王に招かれてミュンヘン大学の美学教授（1852-68）。

44　ティレは，ライプツィヒでドイツ語と英語の言語学と哲学を学び，1890 年の教授資格論文は「ファウスト博士のドイツ民謡」（*Die deutschen Volkslieder von Doktor Faust*）。1890 年にグラスゴウでドイツ語・ドイツ文学の講師。1899 年教授。ニーチェの『ツァラトゥストラ』を英語に翻訳。英語版ニーチェ全集の編者。1897 年『ダーウィンからニーチェまで』（*Von Darwin bis Nietzsche*）。イギリスでそれまでの自由主義者の立場から社会的ダーウィン主義者かつ国粋主義者となった。1900 年にドイツに帰国してからは経済学的，社会政策的分野に従事。社会的ダーヴィン主義と工業的近代化をめぐる論争のなかで問題の多い人物とされた。

45　ヘッケルは生物学者，哲学者。イエナ大学教授（1865-1909）。イエナに系統史博物館を創設（1907）。ダーウィン（Darwin, Charles Robert 1809-82）の進化論を支持。

続いてカフェに行った。日曜日の散歩には，当時すでに教員になっていた，ヘレーネの下宿の同室の女性やティレの研究仲間，それまでティレが毎日会っていた医師などが最初は一緒だった。この研究仲間の男性はヘレーネに恋をして，たとえ7年かかろうと彼女の心が自由になるまで待つと言明した。このエピソードは，ヘレーネが当時どれほど魅力的な女性であったかを示していよう。

ヘレーネは，ヴィルヘルム時代のモラルを壊す可能性のある，既婚男性ティレとの恋愛の困難と問題を十分に意識していた。むしろそれゆえ抑制のきいた親密な関係の「類の無い美」を享受した。ヘレーネ自身の言葉によれば，「おそらくそれは無制約的信頼の，持続的な精神的献身の――人生においてなかなか体験できないような――幸福のための予備条件の一つですらあった。一般的に女性にとっての，また特別に私個人の運命にとっての発展時代の複雑さは，すべての人生願望が永続的に同時に満たされることを許しはしなかった。一人の男性に抱く理想的な要求をすべて満たすように見える人間に出会うことは，喜ばしく素晴らしい体験であった。彼をただちにいつも所有することはできないとしても」(Wickert 1991: 40-41) と振り返っている。ヘレーネにとってその幸福感は間違いなく本物の恋愛感情によるものではあったが，既婚者という制約が意識されていた。

ティレとヘレーネは毎日会い，ニーチェについて，社会主義について，ドイツ抒情詩やロマン主義について存分に話した。ドイツ語の二人称は，親しい関係を示す du を用いるか，敬意を示す Sie を用いるかで関係の距離が示されるが，ふたりは最初は無論 Sie を用いていた。それはふたりの間の「盾のようであり続けた」にもかかわらず，「近さ，信頼，昇華されたエロティック」がこの関係の性格であった。ヘレーネは，「ひとはその相手から子どもを欲しいと願う人間のみを本当に愛する」というのが「ニーチェの意味」での愛であると理解していたために，ティレがヘレーネを本当に愛していると思っていた。ニーチェの意味での恋愛について議論するとき，現実を見据えていた女性のヘレーネは「ひとはすべては持てない！」という答えを出し，ティレはそれに対して「しかしあなたはすべてを持つべきだ！」(Wickert 1991: 41) と要求した。男性の持つ人格的発展の可能性のすべてを，女性でありながら実現したい願望を抱き，学問を望み，職業に就いて経済的に自立し，そのひとの子どもを産みたいと望むほどの相手との本物の恋愛の幸福も手に入れ，かつ結婚し，子どもを産む，これがすべてであるなら，すべてを一度に手に入れることなどほとんど不可能だということは，女性にとっては明らかだった。しかし男性であるティレはこのことの現実の不可能性をどれほど理解していたのだろうか。

ティレとともに行動していたこの時期，ヘレーネは一度だけニーチェ自身に会った。1897年10月にティレと一緒に，同じ年母親の死後に兄とワイマル（Weimar）に転居したニーチェの妹エリーザベトをヘレーネは再び訪問した。ヘレーネは次のように報告している。「私の滞在の最後のある日に私たちは，白いビュルヌーに包まれたフリードリヒ・ニーチェの生活空間に入ることを許された。そこで長椅子に休んでいる姿が見えたときの光景を私は決して忘れないだろう。濃い眉の下の大きな暗い眼の，心を打つまなざしを決して忘れないだろう。彼はその眼で妹を凝視した，この無言の形で私たちは一体誰なのかと生き生きと質問しながら……。『それは，あなたを尊敬している良い友達よ』と（彼女は）言って，私たちは一瞬彼の握手を受けた。一日中この感動的体験は私のなかで震えていた: それほど偉大で，輝かしい，比類のないものを作った精神を，精神錯乱というこの状況のなかで知るとは」(Wickert 1991: 58)。

エリーザベトを通してヘレーネはその後アルヒーフ研究員であるフリッツ・ケーゲル，ペーター・

ガスト，エルンスト・ホルネッファー（Horneffer, Ernst）などと知り合った。しかしヘレーネ自身はその輪に吸収されることはなかった。彼女は単純なニーチェ信奉者にはならず，むしろニーチェの限界を女性観と社会主義との関係のなかに見てとり，独自の批判的ニーチェ像を持った。またエリーザベトとは「海ほども世界観が隔たっていた」（Stopczyk-Pfundstein 2003: 109）とヘレーネは記している。

ヘレーネは 1897 年に，「フリードリヒ・ニーチェと女性」（Friedrich Nietzsche und die Frauen）という公開講演のなかで自分の考察の成果を提示した。これはすでに 1896 年冬に「学問する女性協会」で初めて行った講演と同じ内容である。ヘレーネはニーチェの価値転換の主張を女性のために転用したが，ニーチェ哲学を女性の立場から熟考していくことは，ヘレーネの「新しい倫理」への展開のために決定的な意味を持った。またヘレーネは 1901 年に発表した「ニーチェの女性嫌悪」（Nietzsches Frauenfeindschaft, in; *Zukunft*）のなかで，ニーチェの女性蔑視を明確に主題にし，この論文は後に 1906 年に『愛と女性』のなかに再録された。ヘレーネによれば，ニーチェの意味での「人間の非常に高いタイプ」には女性のみがなりえた。女性だけが依存関係を自分から疑問に付し，またそれを通して，社会の変化に通じる可能性を持つから，とヘレーネは考えていた。

一方，ティレは，人間は「自然な衝動」によって規定されているという世界像に基づいて早婚を実践した。「個人的性愛」に関しては，パートナーが共通の精神的関心を持っていることと健康とを結婚の土台とみなす点で，ヘレーネとティレは一致しているように見えた。ティレは，翻訳に際して自分を手伝ったロッテとそのような結婚をした。しかし同時に彼は家族への責任すなわち経済的負担に苦しんでいた。「彼は，別のニュアンスではあったにせよ――私のように――金銭を顧慮しない恋愛結婚と自由な精神的躍進という一致しえないものを欲した」（Wickert 1991: 41）とヘレーネは記している。ティレは 1893 年に出版した『民衆奉仕。社会的貴族について』（*Volksdienst. Von einem Sozialaristokraten*）によれば，女性は母親になったならば，たとえ一時的にもせよ育児と家事に奉仕すべきで，自身の家で実現させられる関心のみに従事するべきである，と考えていたとヴィッケルトは解説している（Wickert 1991: 41）。

ロマン主義の探求を通してヘレーネは，最高の文化的開花として恋愛を評価していた。ニーチェ哲学に傾倒する文学者であるティレは，ヘレーネにとって男性としても研究者としても比類なく魅力的であったろうが，同時に早くから妥協できない相違点も明らかだった。彼女はニーチェにおける労働者問題の無視と同様のティレの立場を拒否した。このことは 1897 年のティレとの対話のなかで初めから明確な形をとっていた。すでにエルバーフェルト時代にアウグスト・ベーベル（Bebel, Ferdinand August 1840–1913）を読んで，ヘレーネは社会主義による社会批判の見方を知っていた。

秋にティレはグラスゴウに帰った。「別離は苦痛だったがそれでも私を空虚にはしなかった。……彼は私の冷静な明朗さについて時々少し頭を振った。彼は自分の家族のところに帰った。そして私は，まさに彼が新しい魅力のために古い絆を解こうとは考えなかったがゆえに，彼を愛した」（Wickert 1991: 41），とヘレーネは回顧している。ヘレーネは再び学業とシュライエルマッハーの伝記の助手の仕事に専念した。ティレとヘレーネは規則的な手紙のやり取りをした。

ヘレーネは学生時代に，ひとりの女友達と一回の休養滞在と 2 回の大旅行を企てた。1898 年にシュライエルマッハーの伝記の仕事が終わったとき，3 人の助手たちはみな予期せぬ謝礼をディルタイから得た。金額はちょうどデンマーク旅行分あった。ヘレーネは父親の影響で海をとても好んでおり，デンマークは特に魅力的に見えた。このときの同伴者は当時すでに婚約していた学友であり，彼女は

やがて離婚の後，自活して2子を養うために，著名な学術的月刊誌の編集部で働いた。ヘレーネたちは1898年7月にデンマークに旅立った。ベルリンのシュテッティナー駅（Stettiner Bahnhof）から夕刻出発し，フェリーの甲板で夜を過ごした。シュラン島（Seeland Insel）の東海岸や，北方のクランペンボルク（Klampenborg）など海の近くを旅行し，晩年のクリスチャン・アンデルセン（Andersen, Hans Christian 1805-1875）[46] が死ぬまで過ごした家を訪問した。子ども時代にヘレーネはアンデルセンのメルヘンをとても愛読していた。フレーデリクスボルク城（Frederiksborg）やトルバルトセン博物館（Thorvaldsen-Museum）も訪ねた。デンマークの作家レオポルド・スベント（Svend, Leopold）の母親の家も訪ね歓迎された。ヘレーネは，カスパー・ダーヴィッド・フリードリヒ（Friedrich, Casper David 1774-1840）[47] が1820年に「リューゲンのクリーデ岩（Kriedefelsen auf Rügen）」で描いたヴィソヴェル崖（Wissorwer Klippen）を見たかったので，帰路リューゲン島（Insel Rügen）を経由した。この最中ヘレーネは突然「理解不能の不安」に襲われ，胸騒ぎのために，帰郷を計画より早めに始めるよう同伴者に頼んだ。そこにロッテ・ティレの予期せぬ死亡の知らせが届いた。ヘレーネは休暇を中断してベルリンに帰った。

「私は雷に打たれたようだった……どのように彼はそのような条件のもとで困難な人生の仕事を持続できたのか？　一年前出会いのとき感じた互いの魅力は基本的なものだった。しかし両方の側で誠実な遠慮を通して完全に抑制されていた。もしもふたりの関係に遠慮がなくなったならば，――義務はどうなるのか，家族はどうなるのか？」（Wickert 1991: 41）とヘレーネは記している。グラスゴウで3歳と4歳の子どもの母親代わりをして欲しいというティレの願望と，ヘレーネの持つ「精神的発展への，人格の，また女性の人格の解放への衝動」との間の，長い闘争が始まった。手紙が頻繁に交わされ，結婚やパートナーシップについてのみならず，ふたりの考え方がどれほど異なっているかがすぐに見えてきた。ティレは妻の喪失に深く傷ついて，ヘレーネの葛藤と人生観における相違を正しくは理解できなかった。グラスゴウで彼女を待つ最悪のことは子どもの世話に関することだけだろう，とティレは思った。彼は突然子連れのやもめとなって妨げられてしまった自分の研究と学説に集中したかった。「自分の人生を厳格に自身の法則に合わせることに努める人間の頑固な理想主義は，最後に私を妥協させた」（Wickert 1991: 42）とヘレーネは回顧している。彼女は冬学期をグラスゴウで送ることを決心した。

5　グラスゴウ冬学期（1898/99）

ティレはグラスゴウの大学で新たに開設されたドイツ語とドイツ文学のための講座を持っていた。最初ヘレーネは女子学生寮クイーン・マーガレット・ホール（Queen Margaret Hall）に部屋を借りた。大学から2分のところで，自身の学業のための自由空間を確保しようとしたのだったが，ヘレーネはそこにはほとんど居られず，ただ寮での女性の学友たちとの接触から，自分の視角をドイツを越えて広げることを学ぶことができた点は良かったとしている。グラスゴウのゲーテ協会の会長をしていたティレの紹介で，ヘレーネはゲーテ協会でもう一度「フリードリヒ・ニーチェと女性」と題する講演をして，ティレの友人たちと知り合った。しかしこの学期にヘレーネは，自分の思い描くような生活

46　アンデルセンはデンマークの文学者，童話作家。『即興詩人』（*Improvisatoren*, 1835）。
47　フリードリヒはロマン派画家。コペンハーゲンに学び（1794），ドレスデンに定住（1795）。美術学校で教える（1817）。

共同体は困難だと思い知らされる。

「最初の出会いのころの輝く若い姿を私はもはや彼のなかに見ることはなかった。そのかわりに自閉し暗くひねくれ不安に満ちた男がいた。因習的な周囲の人々に誤解されるかもしれないと臆することなく個人的な問題を生き抜き，解き明かそうとした私の行為は，偏見のないベルリンでは可能だった。しかしスコットランドの大学町では？」(Wickert 1991: 42) とヘレーネは記している。ティレは，ヘレーネに愛と家族生活のほかに彼女自身の精神的発展のための空間を容認する準備はしていなかった。ヘレーネが「彼の妻と子どもたちの母親である以外のものを人生に期待すること」は，ティレにとっては「真実の愛の欠如」(Wickert 1991: 42) に思われた。貧民層の絶望的状況に対するティレの「冷淡な厳格さ」から，ヘレーネはますます距離をとった。ヘレーネが教会のドグマを拒否したにもかかわらず，なぜ山上の垂訓の倫理的理想を捨てようとしないのか，ティレは理解したがらなかった (Wickert 1991: 42-43)。イギリスの政治に対して，ティレの批判は鋭かったが，ヘレーネは植民政策に関してのみそのような批判を共有しただけだった。ふたりはますます苛立って応酬した。「かの数ヶ月から数十年を経た現在からみれば，当時私は余りに不寛容であったかも知れない。それでも私は別様には振舞えなかった」(Wickert 1991: 43) と後にヘレーネは回想した。「一致できないものの一致」をめぐる苦痛と対決のなかで，毎日世話をしたヴォルフラムとエッダの人懐っこさと行為がヘレーネにはむしろ慰めだった。

1899 年 2 月に，ティレは 1 年前に就任したばかりの教授職を辞職した。子どもたちを連れてヘレーネとともにドイツに帰国しようとしたのだった。ブーア戦争 (1899-1902) を拒否した自由主義者に公然と味方したため，ティレが武器を持った学生たちに追いかけられるという事件も起きた。反ドイツ的感情が表面化していた。同僚たちは彼の側に立ったが，大学首脳部は攻撃者を探し出す努力をしなかった。

ティレとヘレーネの別離に関してヴィッケルトは次のように解説している。「ティレへの大恋愛は満たされぬままにならねばならなかった。なぜなら彼らの道は異なる人生観と寛容の欠如のために一緒にはならなかったから。彼女は愛に生きるためにはティレ夫人にならねばならなかった。それどころかヘレーネ・シュテッカーはシュテッカー姓にとどまり，すでに得たアイデンティティを保ち，自立的人生を送りたかった。それにもかかわらずこの決断は深い傷を残した」(Wickert 1991: 43)。

自分の体験をヘレーネは「近代的女性の愛の手紙から」のなかで考察し，『愛と女性』に収録した。感情の陶酔は，実際には非常に離れている現実に対しふたりを盲目にした。しかしティレは，自分自身が人生に要求する自由を女性たちにはほとんど認めなかった。精神的な親近性は彼にとっては決定的なものではなく，エロス的な魅力にすぎず，女性が彼女自身の人生を愛する男性に従属させる前段階にすぎなかった，と彼女は後に記している。

ティレとの別離の傷は深く，最終的な決裂までなお時間がかかった。それは実に 5 年を要し，ヘレーネの学位取得後まで続いた。ヘレーネはイギリスを去った後，エッダとヴォルフラムとの接触を大事にして，子どもたちとだけ手紙のやりとりを続けた。しかし 1901 年夏に，合格した学位取得への祝いの手紙を彼女はティレから受け取った。ヘレーネは混乱し，別離の傷が再び開いた。ティレは 1901 年 4 月に子どもたちと一緒に，両親の住んでいたボンからベルリンに転居し，「ドイツ産業協会 Zentralverband deutscher Industrieller」の事務局長代理として働いた。その後 1903 年 4 月 1 日にはザールブリュッケン (Saarbrücken) に商工会議所の法律顧問として赴いた。ヘレーネは，その間に

ベルリンへ転居し，1902 年春，子どもたちに再会したいという思いに負けて，三人全員を招待した。「危険な譲歩，というのは，私たちの間の古い電流の再生は私たちの本質的相違や心情の相違を消すことはできなかったから。無益な試み，この再開された行き来は新しい傷を開き，今度は決定的な苦い別離となって打ち切られた。私のなかでの 5 年の内的絆は――貴重な青春の年月――はこの受難を必要とした。かつて非常に近く見えたものは今や永久に遠のいた。この挫折の直接的結果は壊滅的だった。それはこの年月の間掲げていた高い理想主義の後で，危険な懐疑主義，ニヒリズム，ほとんどシニシズムを呼び起こしたが，幸運なことに私の本質や経験のおかげで長く続きはしなかった」(Wickert 1991: 44) とヘレーネは記す。というのはヘレーネは「魂の内的治癒力」を信じており，「人生は続く。そして私の人生の仕事はまさに始まったばかり」と自らを励まして乗り越えていった。同年刊行された学位論文にヘレーネはエッダとヴォルフラムへの献呈辞を記した。その後ザールブルッケンでティレは，1904 年に陸軍中将の娘であるアウグステ・ブランダウ（Brandau, Auguste）と再婚した。この結婚からは 4 人の息子が生まれた。ティレは 1912 年に心筋梗塞で亡くなった。

ティレとの交流はヘレーネの思考を確かに深めた。しかし，「私は別の世界観の担い手かつ先駆者との共同生活は考えられないと感じた。たとえば子どもたちだけを共同で育てることも考えられない」(Maierhof 1995: 31)，とも後にヘレーネは記している。愛と学問・職業労働をめぐる，あるいは感性と理性をめぐるその対決は，ヘレーネの人生をさらに規定し続けた。「Dr.T との戦いはダーウィンとニーチェに特に鼓舞された強者の権利という理念が問題であって，そこで私はむしろ新しい価値設定をめぐって，すなわち洗練された性のモラルのための新しい感情をめぐって戦った。『エロティックと利他主義』の統一のために」(Schlüpmann 1984: 14)，とヘレーネは総括した。

その後もヘレーネがティレとの破局を克服するのは非常に難しかったと推測される。ヴィッケルトは，1903 年から始まり生涯ヘレーネの健康問題となる体重増加に注目して，「さらなるそのような負傷から自分を守る一種の甲冑として」，太れば「魅力的でないから」攻撃されないという無意識の防衛として，必要としたのではないかと疑問を投げかけている（Wickert 1991: 44)。さらに，1922 年に出版された小説『愛』(*Liebe*) のなかでヘレーネは，明らかにティレとの体験をもとにして，自立的生き方を希求する女性の恋愛の物語を描いている（掛川 2008)。主人公イレーネ（Irene）は，既婚男性ロベルト（Robert）と愛し合う。ロベルトはイレーネと精神的共同性とエロス的な魅力（恋愛）で結ばれているにもかかわらず，市民的二重道徳を破り離婚することはできない。小説には愛することと自立的女性の要求を貫くという願望の限界が明瞭に描かれ，イレーネは別離を選び，ふたりは別々の生涯を送る。しかし恋愛のストーリーは別として，この小説にはいたるところにヘレーネのこの学問修業時代の豊かな学生生活の体験がちりばめられており，興味深い作品である。

6　学位論文執筆: ベルンとミュンヘン（1899-1901）

ドイツに帰国後ヘレーネは，エルバーフェルトの親元を短期間訪問した後ベルンに向かった。父親はヘレーネを経済的に援助することで学業を可能にしていた。ベルンではオスカー・ヴァルツェルがヘレーネの学位取得計画の面倒を見た。ヴァルツェルとヘレーネはすぐに「非常に良い友好的な関係」になれた。彼とヘレーネは，ヴィンケルマン（Winckelmann, Johann Joachim 1717-1768)[48] からヴァッ

48　ヴィンケルマンは美術史家，美学者。ハレ大学神学部卒業（1740)。ドレスデンでギリシア美術品の模造品に関する論考を発表。ローマに赴く。『古代美術史』(*Geschichte der Kunst des Alterstums*, 1764）を著す。

ケンローダー（Wackenroder, Wilhelm Heinrich 1773-1798）[49] までの 18 世紀における芸術観の変遷についての歴史的研究の計画を取り決めた。その芸術観はヘレーネによれば，「寛容と人間愛」によって特徴づけられている。学位論文執筆の年月を「何も分からない幸福な時代」，「私たちはもっと高い段階に恒常的に上昇できると信じることを許されていた」（Wickert 1991: 31-32），とヘレーネは書いている。女性にとっても「豊かな生の可能性」に満たされた日々に見えた。無論学位論文執筆後には，女性には学究的生活の可能性はほとんど閉ざされていたのだが，執筆中はただ学的探求だけに没頭できたのであろう。

ベルン大学では，ヘレーネの時代にはただひとりの女性が教えていた。それは哲学の「私講師」（Privatdozent）ロシア人博士アンナ・トゥマーキン（Tumarkin, Anna 1875-1951）[50] であった。ヘレーネはトゥマーキンとたっぷりと哲学的議論をした。「ついでながら私たちは本質的に非常に違っていた。彼女は厳格に世俗に背を向けて学問に集中したが，私は私たちの生を，豊かに包括的に実り多く形成するために変革したかった」（Wickert 1991: 32），とヘレーネは記す。ひたすら禁欲的に学問に励む先輩女性と異なり，ヘレーネは，ロマン主義の女性の自由な生き生きとした姿に，真実の愛に生きようと様々に模索しまた生き切った彼女たちの姿に親しんできた。また生を充実させる美的な力への確信も持っていただろう。

1900 年秋に，博士論文の調査のため数ヶ月の間ベルンからミュンヘン（München）にヘレーネは移り住んだ。その直前にヘレーネはトゥナー湖（Thuner See）の上流のエーシー（Aeschi）で数週間休養した。そこでヘレーネは恐らくはマルタ・ウンフェルハウと推測される女友達の訪問と妹のリザ（Stöcker, Martha Elisabeth genannt Lisa 1873-1959）の訪問を相次いで受けた。ティレとの別離は半年前のことであり，ヘレーネはベルナー・オバーラント（Berner Oberland）の山々の眺望を前にして，この別離の体験を何とか克服しておきたかった。

ミュンヘンについてヘレーネは，「生の喜びに満ちた興奮の地……，それほど大都市的でなく，ベルリンのようにもっぱら仕事のテンポに呑みこまれることもなかった」（Wickert 1991: 32），と好意的に記している。現代のミュンヘンと同じように，文化的な魅力にあふれ，落ち着いた，しかし自由な都市の雰囲気が当時もあったのであろう。ヘレーネは集中して調べねばならず，「宮廷図書館」（Hofbibliothek）の自分の場所には資料の山が積み重なった。文献史家のエミール・ズルガー=ゲービンク（Sulger-Gebing, Emil 1863-1923）が彼女の調査の進展の面倒を見た。若きドクトランディン（博士候補学生）であるヘレーネは，ヴァッケンローダーから着手して，初期ロマン主義を文学的，芸術史的，音楽学的視点から学際的に研究したいという要求を持っていた。ヘレーネはピナコテーク（Pinakothek）を毎日昼食後一，二時間訪問した。ヴィンケルマンの芸術史的考察を「ピナコテークの芸術品との絶えざる交流」において学ぼうと務めた。ルーベンス（Rubens, Peter Paul 1577-1640）[51] の作品は，彼女には「この数ヶ月のなかで尋常でなく魅力的」と映じた。ひどい結膜炎に悩まされて

49　ヴァッケンローダーは文学者。ティークと親交。ドイツ中世芸術の美と偉大さを発見し，芸術と信仰の融合に憧憬と帰依を捧げた。夭折。

50　トゥマーキンは哲学者。ロシア生まれ。哲学，歴史，独文学をベルン大学で学ぶ。1895 年に博士論文「ヘルダーとカント」（*Herder und Kant*）で学位取得。ベルリンのディルタイのところで学問を続行。1898 年ベルンで女性として初めて教授資格論文を執筆。1909 年に哲学の非常勤教授になる。1921 年スイス国籍取得。著書多数。ベルンで死亡。

51　ルーベンスはフランドルの画家。バロック絵画の代表的作家。

芸術鑑賞を制限したときには，シュワービンク（Schwabing）のカウルバッハ通り（Kaulbachstraße）にある住居から，英国庭園（Englischgarten）へと向かい，またニュムフェンブルク（Nymphenburg）やシュタルンベルガー湖（Starnberger See），コッヘル湖（Kochelsee）への散策を企てた。

ミュンヘンでのヘレーネの最も重要な知人はリカルダ・フーフ（Huch, Richarda 1864-1947）[52] である。リカルダの論文「ロマン主義」をヘレーネは興奮して読んで，彼女と知り合いたいと望み，共通の友人に紹介してもらった。リカルダは若くして結婚してルートヴィクス広場（Ludwigsplatz）に住んでいた。ビュシー（Bussy）と呼ばれた娘のマリエッタ（Marietta）はちょうど1歳で，彼女の夫はルイトポルト広場（Luitpoldplatz）で歯科医を開業していた。ふたりの女性は世紀末のミュンヘンで，ロマン主義の重要な女性たちについて意見交換した。

ヘレーネは自伝のなかで，後の「リカルダの人生における悲劇的な出来事」についても記述している。リカルダは若い時代の秘められた恋人――従兄のリカルド・フーフ――に再会した。彼は恋人を最初家族への考慮から思い切ったが，今度は両者はそれぞれ離婚し，再婚した。しかしこの二度目の結婚は，リカルダの出生地ブラウンシュヴァイク（Braunschweig）で営まれ，3年で破局を迎えた。リカルダは，「ほがらかで，自信に満ち，開放的で，精神的に非常に活発な人物から，（すでに戦争前に）その間に愛想の無い，内向的で，苦痛と失望によって頑なな人間になった。この喜びのなさは彼女の全存在を覆って，他者さえをも抑圧した」（Wickert 1991: 33）。ヘレーネがいかに人物とその人生に対する洞察力を持っていたかを知ることができよう。

リカルダ・フーフを通してヘレーネはマリー・バウム（Baum, Marie 1874-1964）[53] と知り合ったが，バウムはチューリヒの勉学の同僚であり，後にBDFのなかで指導的に活動した。ヘレーネはエミー・フォン・エギディ（Egidy, Emmy von）[54] にも会ったが，エミーはベルタ・フォン・ズットナーの『武器を捨てよ！』が出版された後すぐに，ミュンヘンで平和運動を始めた。ヘレーネは，「女性の利益協会」（Verein für Fraueninteressen）のミュンヘンの議長であるイカ・フロイデンベルク（Freudenberg, Ika 本名 Friederike 1858-1912）[55] とも知り合いになり，イカとはすぐさま理解しあった。

---

52 リカルダ・フーフは，新ロマン主義と新古典主義の女流作家。チューリヒ大学で歴史と哲学を学んだ最初の女性の一人。1891年に哲学博士号取得。1897年までチューリヒとルレーメンで司書と女教師。シュテファン・ゲオルゲ（George, Stefan 1868-1933）とフーゴー・フォン・ホフマンスタール（Hofmannstahl, Hugo von 1874-1929）とともに，自然主義にいたる新ロマン主義の反潮流を始めた者のなかに数えられる。1899年と1902年に2巻の『ロマン主義』（*Die Romantik*）を出版。これによって新ロマン主義運動を促進し，抒情詩，小説特に優れた歴史小説を書く。

53 バウムは化学者。母方はメンデルスゾーン=バルトルディ（Mendelssohn-Bartholdy）の家系。チューリヒで学ぶ。ベルリンで6人の研究員の実験室長。1902年にバーデン大公国の最初の商業監督となった。ここでゲルトルート・ボイマーと出会いハンブルクでともに「社会女学校」（Soziale Frauenschule）を指導。BDFを率い，1919年にワイマール国民議会で議員になった。

54 エミー・フォン・エギディはモリッツ・フォン・エギディ（Egidy, Moritz von 1847-1898）の娘。父のモリッツはザクセンの古い官吏の家柄の出の将校であったが，敬虔なキリスト者として王権と協会の繋がりを批判した文書を書き，1891年に退役させられた。その年彼はエギディ運動（Egidy-Bewegung）をキリスト教的基盤に基づく人間の共同生活の根本的刷新のために始めて，後に平和運動を支援した。

55 フロイデンベルクはピアニストとしての教育を受ける。1893年にミュンヘンのゾフィー・グードシュティッカーのもとに転居。ゾフィーは・アニタ・アウグスブルクとともに当時有名な写真スタジオ「宮廷アトリエ・エルヴィラ」（Hofatelier Elvira）を開設した女性。1894年に「女性の利益協会」（Verein für Fraueninteressen）を設立し，ないがしろにされていた精神的かつ職業的女子教育に尽力。女性のための職業や法律の助言や職業仲介のために活動。1909年に「バイエルン女性協会同盟」（Hauptverband bayerischer Frauenvereine）を創設。

イカは女性写真家のゾフィア・グートシュティッカー（Goudstikker, Sophia 1865-1928）と一緒に住んでいた。そのイカの家をヘレーネは頻繁に訪問し，イカが，女性にとって結婚と母性は学問と統一できないというヘレーネ・ランゲ（Lange, Helene 1848-1930）[56] の見解に従っていることに失望した。女性運動のなかでも，ヘレーネの立場は新しいものであった。禁欲的な女性運動家への批判的見解は小説『愛』のなかにもしっかり書き込まれている。

イカの家でヘレーネは作家のフランツ・ブライ（Blei, Franz 1871-1942）とその妻マリー（Marie）と知り合った。「フランツ・ブライは生まれはオーストリア人で，細身で，金髪，非常に上品な流儀で，女性に対して如才なかった。その精神的関心と結びついた彼のエレガントな風貌は，女性を魅了するのにとても適っていた……。初期ロマン主義への傾倒は共通しており，強い絆が生まれた」（Wickert 1991: 33），というのがヘレーネのブライへのコメントである。ヘレーネとブライはしばしば宮廷図書館で意見交換のために会って，そのような機会にはカフェに行った。ブライはシュライエルマッハーの『ルチンデについての親密な書簡』（*Vertrauten Briefen über Luzinde*）の貴重な初版とボッカチオ（Boccacio, Giovanni 1313-1375）[57] の『フィアメッタ』（*Fiammetta*）をヘレーネに贈った。ヘレーネの友人たちはこの交際の親密さを案じ彼女に警告しようとしたが，「この場合それは現実に杞憂であった。誠実な人間的傾向と，この 18 世紀の男が――というのは根底において彼はそれだったから――……とても慣れていた優雅なお遊びの間を，私は明瞭に区別しようとした。私は心をこの精神的戯れの恋のなかには――ひとがそう呼ぶとしても――巻き込ませなかった。そのような不適切さによって恥をさらさないですむ心理学的な鋭い眼差しを私はすでに持っていた」（Wickert 1991: 34）と後にヘレーネは述懐している。彼を通してヘレーネは，ベッティーナ・フォン・アルニムに関するそして，ニーチェの女性像に関する 2 冊の書物の出版のために，「文化出版」（Die Kultur）と契約を結ぶことができた。「そのように私はフランツ・ブライと私の間のこの美的―文学的関係のことを楽しく回顧する。なぜならすべては苦痛もごたごたもなしに経過したから。この関係には心理学的な魅力があり，この友好的で，精神的な関係の担い手が男性と女性であったという事実を通して，少し温かく薔薇色だった」（Wickert 1991: 34），とヘレーネはミュンヘンでの数ヶ月の思い出の章を閉じている。

7　学位取得（1901）

ヘレーネの深く宗教的な家族出自，発展と自由への努力，若い娘としての読書体験などから推察すると，彼女がロマン主義を博士論文のテーマにしたことは少しも不思議ではないだろう。ヘレーネはロマン主義のマニフェストであるヴァッケンローダーの 1797 年に出版された『芸術を愛する修道士の告白』（*Herzensergießung eines kunstliebenden Klosterbruders*）を吟味し，この著作を，「私たちの文化の芸術家的美学的発展における転換点」（Wickert 1991: 34），と位置付けている。ヘレーネはテキス

56　ランゲは女子教育者。ドイツの女性運動の指導者。1871 年に女性教員試験受験のためベルリンに来る。1876 年私立の高等女学校教師。1889 年女性のための「レアル・コース」を導入。1890 年アウグスト・シュミット（Schmidt, August 1833-1902）らとともに「普遍ドイツ女教師協会」（Allgemeiner Deutscher Lehrerinnenverein. ADLV）を設立。1893 年に「レアル・コース」は「ギムナジウム・コース」に発展。雑誌『女性』の編集者。1893 年から 1921 年まで「全ドイツ女性協会」（Allgemeiner Deutscher Frauenverein. ADF）の代表。1894 年から 1906 年まで「ドイツ女性協会同盟」（Bund Deutscher Frauenvereine. BDF）の代表。

57　ボッカチオはイタリアの文学者。1470 年刊行の『十日物語』（*Decameron*, 1348-53）が主著。

トを，18 世紀末に構造化する市民的イデオロギーの枠内で，宮廷によって支援され要求された芸術を，贅沢の奉仕者として批判したプログラムであると解釈した。主観的感情の優位，自由，寛容が強調され，芸術が「新しい福音」となったかのようであった。このようなロマン主義の価値観はヴァルツェルと女性の弟子ヘレーネとの師弟関係に良い影響を与えていた。それは信頼に満ちた自由な意見交換の体験であった。

ヘレーネは，ヴァッケンローダーのロマン主義的マニフェストとヴィンケルマンの芸術史的考察の理論的整理を終えた後，ヴァルツェルに草稿を渡した。「それは彼がそれまで入手した研究のなかでも最も優れたもののひとつであり，彼自身そこから多くを学んだ」(Wickert 1991: 35)，というのが彼の回答であった。テキストをただちに博士論文として学部に提出するよう，ヴァルツェルは彼女を激励した。ヴァッケンローダーの生涯と功績とロマン主義への彼の影響に関して集めた膨大なヘレーネの資料は，さらに 2 部に分けてまとめて作業しなければならないほどの量であったが，しかるべく彼は学部でそれも弁護した。ヴィッケルトによれば，その学部での会議の記録は次のように記されている。「……自立した，非常に良い，確かに優秀な仕事。仕事全部は大きな本になるだろうから，ヴァルツェル氏の提案に基づき，ひとつの完結した章を表現している一部分を学位論文として承認することが決定される」(Wickert 1991: 36)。

ドクトランディンとしてヘレーネは，ルツェルン（Luzern）から来たアウグスタ・シュタインベルク（Weldler-Steinberg, Augusta geb. Steinberg 1879-1932）[58] と一緒に，筆記試験（Klausur）と口頭試問の準備をした。ずっと後にふたりは 1919 年の 5 月にチューリヒで，ヘレーネが「平和と自由のための国際女性連盟」(Internationale Frauenliega für Frieden und Freiheit）の設立会議に際して滞在したとき，もう一度だけ会っている。1901 年の 6 月末にふたりは，国民経済学と哲学と文学史の筆記試験を書いた。この課題に関して，自伝草稿によればヘレーネは，ヴィルヘルム・マイスターから現代までの成長小説という文学史のテーマだけを覚えていた。学部の試験記録は期日と点数の通知を記しているだけである。1901 年 7 月 1 日の夕方口頭試問は開催された。ヘレーネは全体評価は「優」(magna cum laude）を取った。「もしも男性であったなら，彼女のこの 157 頁の強烈で良く調査された論文は大学での経歴へと道を開いたであろう。この論文はロマン主義の彼女の研究の完成をも可能にしたであろうが，ヘレーネ・シュテッカーは講演と著作活動を通して生活費を稼ぐ必要のために，そこからすぐに離れねばならなかった」(Wickert 1991: 36）のである。女性が容易に大学の教員になれるようになる道は，20 世紀末の現代フェミニズムの国際的高まりと女性の地位変革運動のアカデミックな世界への普及によって劇的変化を遂げる。それ以前はほとんど不可能であり続けた。

テキストは 1902 年に，英文学研究者アロイス・ブランドル（Brandl, Alois 1855-1940）とベルリンのエーリヒ・シュミットが編集したシリーズ『パレストラ（*Palaestra*） 独語・英語における研究とテキスト』第 26 巻として，ベルリンのマイヤー・ミュラー出版社から出版された。学位論文の最後の章である「音楽への関心」だけは，別に出版される見込みのもとで断片のまま残され，ヘレーネは

58　シュタインベルクは編集者，作家。スイスで教育を受け，最初のユダヤ人女性として，ルツェルンの初等教育教員の資格を得た。1897 年よりベルンで歴史を学び始め，1900 年に「中世におけるスイスのユダヤ人の歴史に関する研究」によって哲学博士の学位を取得。1916 年より「ユダヤ新聞」の編集者。1919 年チューリヒでユダヤ人の通信事務所の所長を引き継ぐ。シオニズムへの参加。2 巻の大著『16 世紀から解放後までのスイスにおけるユダヤ人の歴史』(*Geschichte der Juden in der Schweiz vom 16. Jahrhundert bis nach der Emanzipation*, 1966-70）を編集。

2年間待ったが結局出版されなかった。ヘレーネの学位論文の終了は1901年夏にドイツの新聞に報じられた。

合格した試験の後1901年7月末に，彼女は女友達とルツェルンで待ち合わせ，ミラノに出発し，イタリア旅行を始めた。頂点のひとつはベニスで，「マルコ広場は私たちを魅了した。私たちはニーチェがベニスを讃えて作ったゴンドラの歌と，当地で死んだ彼の友人の偉大なリヒャルト・ワーグナー（Wagner, Richard 1813-1883）を思い出した」（Wickert 1991: 37）とヘレーネは書いている。ベローナでロメオ（Romeo）とジュリエット（Julia）の墓を訪ね，ガルダ湖（Gardasee）に向かった。ガルダ湖は，子ども時代にヨハンナ・シュピリ（Spyri, Johanna 1827-1901）[59] の授業を受けて以来，ヘレーネが長く夢見てきた湖であった。さらにベルニナ峠（Bernina-Paß）を越えて徒歩でエンガディン（Engadin）に行った。ヘレーネは，ジルバプラナ（Silvaplana）とジルス湖（Silser See）の間のオーバーエンガディン（Oberengadin）のジルス・マリア（Sils-Maria）に行った。ジルス・マリアはニーチェが1881年と1883年から1888年まで夏に滞在して，『ツァラトゥストラ』を書き，後の遺稿集『権力への意志』（*Wille zur Macht*），『偶像のたそがれ』（*Götzendämmerung*），『ワーグナーの場合』（*Der Fall Wagner*）そして『アンチ・クリスト』（*Der Antichrist*）を書いた。当時は「ニーチェが住んでいた小さな白く塗られた小部屋をまだ見ることができた」（Wickert 1991: 37），とヘレーネは1906年に再び訪問した際に報告している。

さて学位を取得したヘレーネは，これから今後の居住地を決めねばならなかった。まず彼女はミュンヘンの女友達からこの都市について意見を聞いた。ミュンヘンは豊かな色彩に溢れ，刺激に満ちた生活の予感があり，とても魅力的に見えた。しかしヘレーネは充実した精神的闘争の都市としてベルリンを選んだ。そこで彼女は数週間両親のもとを訪問し，8月に再びベルリンにもどった。ベルリンでヘレーネはヴィルマースドルフ，プファルツブルガー通り70番地（Wilmersdorf, Pfalzburgerstraße 70）に住まいを見つけ（Wickert 1991: 38），2番目の妹リディア（Sötcker, Lydia 1877-1942）と暮らし始めた。リディアは女性教員試験の準備をするために姉のもとへ来たのである。

1902年に出版された学位論文の最後に，ヘレーネは次のような「履歴書」を付している。

> エルバーフェルトで私ヘレーネ・シュテッカーは，商人ルートヴィヒ・シュテッカー（Stöcker, Peter Heinrich Ludwig 1839-1917）と彼の妻旧姓ベルクマン（Stöcker, Hulda geb. Bergmann 1849-1921）の長女として1869年11月13日に生まれ，教育をエルバーフェルトの市立高等女学校で受けました。1892年1月からベルリンでルチエ・クライン嬢のゼミナールに通い，1893年11月ベルリンで中等及び高等女学校の女性教員の試験に合格しました。この上に私はヘレーネ・ランゲ嬢による「女性のためのギムナジウムコース」の個別コースならびにヴィクトリア＝リセウムでの上級女性教員試験のための歴史コースに参加しました。1896年秋から私は10学期を―6学期ベルリン，1学期グラスゴウ，3学期ベルンで―ドイツ文学，歴史，国民＝経済学と哲学の研究に従事しました。講義は次の教授のもとで受けました：ブライジヒ，デソワール（Dessoir, Max 1867-1947）[60]，ディルタイ，フライ（Frey, Adolf 1855-1920）[61]，ガイガー（Geiger, Ludwig 1848-

59 シュピリは児童小説家。『ハイジ』（*Heidi*, 1880）で知られる。

60 デソワールは美学者，哲学者。一切の美的現象を心理学的立場から考察。

61 フライはスイス人。作家，独文学者。1875-78年に独文学と芸術史をベルンとチューリヒで学ぶ。学位取得後，1879年からライプツィヒとベルリンでも学ぶ。1882年から故郷のアーアラウ（Aarau）でドイツ語教師，1898年からチューリヒ大学でドイツ文学史の正教授。重要なスイスの画家や作家の伝記のほか，小説も書いている。

1917)，ヘルマン（Herrmann, Max 1865-1942)，ヒンツェ（Hintze, Otto 1861-1940)，ヤストロフ（Jastrow, Ignaz 1856-1937)，レンツ（Lenz, Max 1850-1932)[62]，マイヤー（Meyer, Richard Moritz 1860-1914)[63]，ナウデ（Naudé)，オンケン（Oncken, August 1844-1911)[64]，パウルセン（Paulsen, Friedrich 1846-1908)[65]，プファライデーラー（Pfleiderer, Otto 1839-1908)，レーディガー（Roediger, Max 1850-1918)，シェファー＝ボワコースト（Scheffer-Boichorst, Paul 1843-1902)，エーリヒ・シュミット，シュモラー，ジンメル，シュタイン，ティレ，ヴァグナー，ヴァルツェル。そのほか私には，ドイツ文学，歴史学，哲学，芸術史，国民経済学の演習，特に，次の教授のゼミナールへの参加が許されました: ブライジヒ，デソワール，ディルタイ，フライ，ヤストロフ，オンケン，シェファー＝ボワコースト，エーリヒ・シュミット，シュタイン，そしてヴァルツェル。すべての私の先生方に，特にブライジヒ，ディルタイ，エーリヒ・シュミット，ティレとヴァルツェルにこの場を通して心よりの感謝を表明いたします（Stöcker 1902: 47)。

ここでティレの名前を特に学恩ある教授たちの名前として挙げていることは注目に値するだろう。現実の関係が苦痛に満ちた失望と別離に終わったとはいえ，ヘレーネにとってティレと交わした対話の日々は，彼女の精神的教養の世界を真に有意義なものへと決定的に深めたのである。

むすびに

今回は，ベルリンに出てきてからのヘレーネ・シュテッカーの学問修業時代を対象として，ヘレーネの生き生きとした生活を包括的に描くように努めた。1892 年から 1901 年にいたる学生時代は，21 歳から 30 歳までにあたり，真剣な学業と恋愛の，痛ましくも輝かしい青春時代である。この学問修業時代に得た教養と人間的経験は，彼女の個人的信念としても理論的構想にとっても，1905 年に「母性保護同盟」(Bund für Mutterschutz) を設立して以降のヘレーネの国際的な活躍の揺るぎない基盤となっている。もしもヘレーネが，女性でなければ可能であったろうが，大学教員となりさらにロマン主義研究を深めていたら，どうであろうか。しかしおそらくヘレーネは，その場合でも社会運動への参加をやめなかったであろうし，むしろ彼女が女性であったことが重要であって，何よりも，女性の立場からニーチェ哲学やロマン主義美学や女性の経済的自立論を用いて，男性知識人を巻き込んでの社会改革運動に乗り出したことに，その決定的な意味があるのだろう。その後の活動のなかで，ヘレーネは豊富な人脈を生かし続けまた広げていった。その旺盛な生命力と強い人格と堅固な信念は，この学問修業時代に十分示されている。

このあと 1901 年から 1905 年までヘレーネは，ベルリン・レッシング大学（Lessing-Hochschule）でニーチェ哲学とロマン主義の女性について講義を持ちながら，評論活動に従事する。そしていよいよ 1905 年から「母性保護同盟」を中心として，生涯をかけて母性保護運動，性改革運動，産児調節運動，平和運動に奔走するようになっていくが，それは稿を改めて取り組むこととする。

---

62 レンツは歴史家。ベルリン大学教授（1890-1914)。ランケの思想を受け継ぐ。諸国民，国家，宗教の発達を歴史的に考察。

63 マイヤーは文学史家。ベルリン大学教授（1901)。視野の広いドイツ文学史と評論を書く。

64 オンケンは経済学者。ベルン大学教授（1878-1910)。ケネーとスミスを研究し，古典派経済思想を代表した。

65 パウルセンは哲学者。ベルリン大学助教授（1878)，教授（1893-1908)。信仰と自然科学的知識との調和を目的とし，カントを心理発生論的に解釈。

引用文献

Bockel, Rolf von (1991) *Philosophin einer „neuen Ethik": Helene Stöcker (1869-1943)*. Bormann & von Bockel Verlag, Hamburg.

Gerhard, Ute (1995) *Unerhört. Die Geschichte der deutschen Frauenbewegung*. Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH. Reinbek bei Hamburg.

岩波書店編集部編（1981）『岩波西洋人名辞典　増補版』岩波書店.

掛川典子（2008）「ヘレーネ・シュテッカーの小説『愛』と「新しい倫理」」昭和女子大学女性文化研究所編（2008）『女性文化と文学』御茶の水書房，東京，155-179.

掛川典子（2009）「ヘレーネ・シュテッカーのエルバーフェルト時代（1869-1892）」昭和女子大学近代文化研究所（2009）『学苑』828号，東京，1-17.

掛川典子（2010）「家事評価をめぐって―ヘレーネ・シュテッカーとマリアンネ・ヴェーバーの場合―」昭和女子大学女性文化研究所編（2010）『女性と仕事』御茶の水書房，東京，297-324.

Maierhof, Gudrun (1995) „Werde, die du bist !" Porträt von Helene Stöcker. In: *Hypatia* 6. 1995, Wiesbaden.

Rantzsch, Petra (1984) *Helene Stöcker. Zwischen Pazifismus und Revolution*. Buchverlag Der Morgen, Berlin.

Schlüpmann, Heide (1984) Radikalisierung der Philosophie: Die Nietzsche-Rezeption und die sexualpolitische Publizistik Helene Stöckers. In: *Feministische Studien 3*. Jahrgang Mai 1984 Nr. 1. Beltz.

Stöcker, Helene (1902) *Zur Kunstanschauung des XVIII. Jahrhunderts. Von Winkelmann bis Wakkenroder*. Palaestra XXVI.Berlin.

Stöcker, Helene (1906) *Die Liebe und die Frauen*. J. C. C. Bruns' Verlag, Minden.

Stöcker, Helene (1922) *Liebe*. Rösl & Die. Verlag, München.

Stopczyk-Pfundstein, Annegret (2003) *Philosophin der Liebe. Helene Stöcker: Die „Neue Ethik" um 1900 in Deutschland und ihr philosphisches Umfeld bis heute*. Sophia & Logos, Stuttgart.

Vierhaus, Rudolf (hrsg. 2005-2008) *Deutsche Biographische Enzyklopädie*. Vol. 1.～12., 2. Ausgabe. K. G. Sauer, München.

Wickert, Christl (1991) *Helene Stöcker 1869-1943; Frauenrechtlerin, Sexualreformerin und Pazifistin; eine Biographie*. Verlag J. H. W. Diez Nachf., Bonn.

（かけがわ　のりこ　　歴史文化学科）